

1列王記4章 20-27 節 「平和と繁栄の御国」

1A 呪われた地

1B 「御国が来ますように」

2B 「地にもなさいますように」

3B イエスによる御国の到来

1C 福音書

2C 御霊の初穂

2A 平和と繁栄

1B 全土の支配 21 節

2B 豊かな食糧 22-23 節

3B 安心の生活 25 節

4B 不足ない生活 27 節

本文

列王記第一の学びを続けます。午後には3章から5章までを学びますが、今朝は4章20節から27節までを読んでみたいと思います。

20 ユダとイスラエルの人口は、海辺の砂のように多くなり、彼らは飲み食いして楽しんでいました。21 ソロモンは、大河からペリシテ人の地、さらには、エジプトの国境に至るすべての王国を支配した。これらの王国は、ソロモンの一生の間みつぎものを持って来て、彼に仕えた。22 ソロモンの一日分の食糧は、小麦粉三十コル、大麦粉六十コル。23 それに、肥えた牛十頭、放牧の牛二十頭、羊百頭。そのほか、雄鹿、かもしか、のろじかと、肥えた鳥であった。24 これはソロモンが、大河の西側、ティフサフからガザまでの全土、すなわち、大河の西側のすべての王たちを支配し、周辺すべての地方に平和があったからである。25 ユダとイスラエルは、ソロモンの治世中、ダンからベエル・シェバまで、みな、おのおの自分のぶどうの木の下や、いちじくの木の下で安心して住むことができた。26 ソロモンは戦車用の馬のための馬屋四万、騎兵一万二千を持っていた。27 守護たちは、それぞれ自分の当番月にソロモン王、およびソロモン王の食事の席に連なるすべての者たちのために、食糧を納め、不足させなかった。

私たちは前回、ダビデがソロモンを王とし、ソロモンが王権を確立したところを読みました。そして、ソロモンによるイスラエル国がどのようになっていくのか、その姿を3章以降で読むことができます。いま読んだところから、その国が平和と繁栄に満ちていたことが分かります。

午後の礼拝で詳しく学びますが、ソロモンの治世下にあるイスラエルは、主がアブラハムに、またモーセを通して約束してくださったことの成就です。子孫が増え、国が強くなり、食べるものは豊

富に与えられ、人々が平和に暮らします。けれども、そのイスラエルは全人類のための神の国の前置きとして神は置かれました。初めの人アダムに対して、神は被造物をすべて与え、「地のすべてのもを支配させよう。」と約束されたのです。平和で繁栄に満ちた国を神は人類に対して約束してくださっていました。

私たちは今、日本という国に生きていて、この国は平和と豊かさがありますが、あまり意識しておられないかもしれません。国民総生産がアメリカ、中国に次いで三位です。そしてもちろん、長いこと平和を享受しています。ですから、このことの恵みを忘れてしまいがちですが、もしこれからご自分が国を建て上げる指導者だとしたら、何を目標に掲げるでしょうか？国民が豊かな生活することですね。貧困からの脱出をいかに行なうのかを真剣に考えるでしょう。そして安全に暮らすことです。周囲の敵に侵略されてしまうかもしれません。国民の財産と生命をいかに保障するかを考えるとします。明治維新の指導者たち、また戦後直後の指導者たちは、こうした目標を第一に掲げて日本を舵取りしようとしていました。平和と繁栄、そして安全は、神に与えられた人の内にある呻きであります。

1A 呪われた地

1B 「御国が来ますように」

けれどもこのように発展した日本でさえ、多くの問題を孕んでいます。世界を見回したら、もっと大きな問題があります。イエス様が地上におられた時も同じで、ユダヤ人たちはローマの圧制の中にありました。そこでイエス様が彼らに祈りなさいと命じられたことの中に、このような言葉があります。「御国が来ますように。みこころが天で行なわれるように地でも行なわれますように。(マタイ 6:10)」

なぜ、神の意思がなされる国がこの地上にないのかと言え、先に話したアダムが神に対して罪を犯したからです。彼が罪を犯したために、この地は呪われたものとなってしまった、と神は宣言されました。そしてローマ 5 章には、彼によって世界に罪が入り、そして死が世界に入ったと書いてあります。

詩篇二篇には、神の国が到来するにあたって、世界の諸国が逆らって、戦いをしかけることが書かれています。「なぜ国々は騒ぎ立ち、国民はむなしくつぶやくのか。地の王たちは立ち構え、治める者たちは相ともに集まり、主と、主に油をそそがれた者と共に逆らう。「さあ、彼らのかせを打ち砕き、彼らの綱を、解き捨てよう。」(詩篇 2:1-3)」なぜ戦いが生じるのでしょうか？ここを読むと、主と主に油注がれた者のかせを打ち砕こう。つまり神とキリストのかせを打ち砕こう。彼らの綱を解き捨てよう、と考えたからです。人が、神の掟という縄目から解き放たれようと考えるところに、争いの種があるのだと教えています。

放蕩息子のことも考えてください。財産の分け前をもらった弟息子は、家にいる枷から解き放た

れたいと思って外に出て行きました。そして、自分のやりたい放題を行ないました。枷また縄を解き捨てたのです。ところが、彼の行き着いたところは何でしょうか？空腹です。何もかも財産を使い果たした後で、その国に飢饉が来て、食べるものにも困ったのです。そして、豚のたべるいなご豆で腹を満たしたいと思うほどでした。神から自由になりたい、自分の考えを解き放ちたいと考えるときに、その時点で私たちに不自由が来ます。

2B 「地にもなさいますように」

けれども、神の御心、神の意思が地上に行なわれる時に、人は自由になり、平和になり、繁栄します。多くの人は、そうなっていない世の中を見て神を非難します。不幸な出来事に見舞われた人々を見て、「神が善であり、神が愛であるなら、どうして神はこのような酷い事を許すのか？」と神を非難するのです。私たちは自分の生活の中で、そしられたことがありますね？してもいないことを、したと断定されることがありますね？その時の気持ちはいかがでしょうか？たいそう気分を害すると思います。実は天地を創造された神は、どんな人よりももっとも多くそしりを受けておられる方です。

世の中で起こっている犯罪は、その犯罪者がそれを行なっているのです。神がその人に罪を犯させたのではありません。世に起こっている天災はどうでしょうか？これも、神が初めに意図したものではありませんでした。アダムが罪を犯して、それで地が呪われたとありますね。人間が罪を犯し、悪を行なったから、今の世が悪魔に明け渡されたというのが真実なのです。

「けれども、神は全能者なのではないか？それならば、なぜそうした悪者を裁かないのか？」と聞かれるかもしれません。ええ、神はそれを必ず行なわれます。今、行なわれていません。けれども今行なえば、たちまち人類は火によって滅ぼされてしまうでしょう。そして、あなたをも滅ぼしてしまわれるでしょう。全ての人々が罪を犯して、死罪に定められているのです。神があえて悪を罰するのを遅らせているのは、人に憐れみをかけておられるからです。どんなに反抗しようとも、その人が悔い改めて神に立ち返るのを忍耐して待つておられるのです。

3B イエスによる御国の到来

1C 福音書

そしてイエス様がこの地上に来られたときに、この呪われた地を癒し、御国へと回復するメシヤとして来られました。「神である主の霊が、わたしの上にある。主はわたしに油をそそぎ、貧しい者に良い知らせを伝え、心の傷ついた者をいやすために、わたしを遣わされた。捕われ人には解放を、囚人には釈放を告げ、主の恵みの年と、われわれの神の復讐の日を告げ、すべての悲しむ者を慰め、シオンの悲しむ者たちに、灰の代わりに頭の飾りを、悲しみの代わりに喜びの油を、憂いの心の代わりに賛美の外套を着けさせるためである。彼らは、義の樫の木、栄光を現わす主の植木と呼ばれよう。(イザヤ 61:1-3)」油注がれた方、つまりメシヤです。この方が貧しい人に良い知らせを伝えられました。心の傷ついた者を癒されました。捕われ人、つまり罪や悪霊どもに捕え

られた者たちを解放されました。盲人の目を開かせました。足なえを立ち上がらせました。

イエス様は、病の霊につかれていて十八年、腰が曲がって伸ばすことのできない女を見て癒されました。安息日だったので、会堂管理者がひどく怒りました。そこでイエス様は言われました。「しかし、主は彼に答えて言われた。「偽善者たち。あなたがたは、安息日に、牛やろばを小屋からほども、水を飲ませに連れて行くではありませんか。この女はアブラハムの娘なのです。それを十八年もの間サタンが縛っていたのです。安息日だからといってこの束縛を解いてやってはいけないのですか。(ルカ 13:15-16)」いかがでしょうか、多くの人がこの会堂管理者のように、しきたりによってキリストによる解放を享受できないようにさせています。キリストのところに来れば、その人には御国が訪れます。けれども、人の作った規則や圧力によって、キリストに個人的に触れていただくことが阻まれてしまうのです。

2C 御霊の初穂

このようにイエス様のところに来た人々のことを、ローマ8章では「御霊の初穂」と呼んでいます。「私たちは、被造物全体が今に至るまで、ともにうめきともに産みの苦しみをしていることを知っています。そればかりでなく、御霊の初穂をいただいている私たち自身も、心の中でうめきながら、子にさせていただくこと、すなわち、私たちのからだの贖われることを待ち望んでいます。(22-23節)」初穂とは、これから来る収穫の代表的存在です。イスラエルでは、初穂の祭りというものがありました。大麦の初穂を主に捧げます。同じように、神の国が到来するときに、その全ての収穫の前に初穂があるということです。神の国が来るときには、全ての病が癒されます。全ての人の貧しさが取り除かれます。このような新しい国の到来の前に、神は御霊によって少しばかりの味わいを、イエスのところに来る者たちに与えてくださるのです。今がその時です。キリストが再来する前に、神がご自分の霊によって、その御国の至福を皆さんが受け取るようにさせていただきます。

2A 平和と繁栄

ソロモンはダビデの子です。ダビデの生涯において、ダビデが苦難からの救いを得た神のしもべであることを学びました。それは、王であるのに苦しみを通らなければいけない神のしもべの姿でした。キリストが王であられるのに、十字架の苦しみを通られたことを予め示していました。そのダビデの子であるソロモンもまた、神の子キリストの姿を表しています。キリストが初めに来られた時は苦しみを受けられましたが、再び来るときには義の王として、この世界に平和をもたらします。私たちが先に読んだ平和と繁栄の姿は、キリストによる神の国を予め示しています。

1B 全土の支配 21 節

再び 21 節を見てください。「ソロモンは、大河からペリシテ人の地、さらには、エジプトの国境に至るすべての王国を支配した。」大河とはユーフラテス川のことです。そこからエジプトの国境に至るまでのすべての国を支配した、とあります。以前、アブラハムに対して神がエジプトの川からユーフラテスまであなたに与える、と言われたそれと同じ範囲のところを神はソロモンに勢力圏とし

て与えられました。

イスラエルにはその地域にある全ての国々を与えられましたが、後に来るキリストの国において神はキリストに全世界の国々を与えられます。「わたしは主の定めについて語ろう。主はわたしに言われた。『あなたは、わたしの子。きょう、わたしがあなたを生んだ。わたしに求めよ。わたしは国々をあなたへのゆずりとして与え、地をその果て果てまで、あなたの所有として与える。(詩篇 2:7-8)』そして、全ての国々だけでなく、全ての個々人がキリストの支配の中に入ります。「それは、イエスの御名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるものすべてが、ひざをかがめ、すべての口が、「イエス・キリストは主である。」と告白して、父なる神がほめたたえられるためです。(ピリピ 2:10-11)」

すばらしいですね、キリストにあつて全てのものが一つにされます。教会も霊的に同じです。キリストが頭となっている時に一つになることができます。「私はこれを主張し、あなたはそれを主張する」ということをすれば、その主張は正しいのかもしれませんが、調和が乱れて、平和がなくなります。平和に必要なのは秩序です。

またイザヤ書には、その隅々にまでいきわたる平和は、主の知識が行き渡るからだと言っています。「わたしの聖なる山のどこにおいても、これらは害を加えず、そこなわない。主を知ることが、海をおおう水のように、地を満たすからである。(11:9)」ソロモンには知恵が備わっていましたが、同じようにイエスご自身の知識が満ちるときに、世界に平和が来ます。ここの箇所では、獅子が羊と草を食べているという場面であり、つまり動物界にも平和が及ぶのです。私たちの教会にも、イエスの知識が一部ではなく、全てに渡って行き渡ることを願い祈り求めましょう！

2B 豊かな食糧 22-23 節

ソロモンの国の特徴は、豊かな食糧でした。20 節、「ユダとイスラエルの人々は、海辺の砂のように多くなり、彼らは飲み食いして楽しんでいた。」そして 22-23 節、「ソロモンの一日分の食糧は、小麦粉三十コル、大麦粉六十コル。それに、肥えた牛十頭、放牧の牛二十頭、羊百頭。そのほか、雄鹿、かもしか、のろじかと、肥えた鳥であった。」

イエスが再臨された後の神の国では、「剣を鋤に、その槍をかまに打ち直し、国は国に向かって剣を上げない。二度と戦いのことを習わない。(イザヤ 2:4)」となります。考えてみてください、現在使われている軍事予算がすべて農業分野に充当されるのです。どれだけの農産物が取れるでしょうか？ 全ての人が無料で食糧を得ることができます。「ああ、渴いている者はみな、水を求めて出て来い。金のない者も。さあ、穀物を買って食べよ。さあ、金を払わないで、穀物を買、代価を払わないで、ぶどう酒と乳を買え。(55:1)」

そして私たちが知らなければいけないのは、霊の救いは無対価で買い求めることができる、とい

うことです。「渴く者は来なさい。いのちの水がほしい者は、それをただで受けなさい。(黙示 22:17)」一生懸命頑張って、報酬を得るのに慣れている私たちは、どうしても救いも自分がその罪を償うことによって、頑張ることによって得ようとしてしまいます。けれども、ソロモンの時代に人々が楽しく飲み食いしたように、主の与える命の水は無対価なのです。

3B 安心の生活 25 節

そしてソロモン時代のイスラエルは、害を受けることなく安心して生きることができます。25 節、「ユダとイスラエルは、ソロモンの治世中、ダンからベエル・シェバまで、みな、おのおの自分のぶどうの木の下や、いちじくの木の下で安心して住むことができた。」木の下に憩うのは、聖書の中で平和に生きることを意味していました。

これは、イスラエルにとっては、また中東の国々にとっては何にも代えがたい貴重なものです。日本で当然とみなされているのが、水と安全です。イスラエルに行けば、これが非常に高価であることを感じ取ることができます。今もエルサレムの旧市街は城壁に取り囲まれています。興味深いことに、アルメニア地区に行きますと、さらに自分たちの地区を城壁で取り囲んでいるのです。実に前世紀まで、人々は城壁の中に住み、集落があるとすると城壁を建てていました。それだけ外敵に脅かされています。けれども、主が再臨されると、ゼカリヤ書の預言によりますと、城壁がなくなります。そして火の城壁が、天使らによる目に見えない城壁ができます(2:4-5)。

詩篇 91 篇は、私たちが住んでいる社会の中で、いかに主が災いから守ってくださるかを教えてくれる、安心を与える約束です。4-6 節まで、「主は、ご自分の羽で、あなたをおおわれる。あなたは、その翼の下に身を避ける。主の真実、大盾であり、とりでである。あなたは夜の恐怖も恐れず、昼に飛び来る矢も恐れぬ。また、暗やみに歩き回る疫病も、真昼に荒らす滅びをも。」そして 10-13 節、「わざわざは、あなたにふりかからず、えやみも、あなたの天幕に近づかない。まことに主は、あなたのために、御使いたちに命じて、すべての道で、あなたを守るようにされる。彼らは、その手で、あなたをささえ、あなたの足が石に打ち当たることのないようにする。あなたは、獅子とコブラとを踏みつけ、若獅子と蛇とを踏みにじろう。」

いかがでしょうか、私たちは自己管理の一貫として、家の鍵を閉め、また将来の保証として生命保険に加入することは良いことですが、不安で怯えているのであれば、それは主の民にとって杞憂であることを知らなければいけません。主は必ず私たちを守ってくださいます。

4B 不足ない生活 27 節

そして平和について、最も大切なことは「不足がない」ということです。27 節を見てください。「守護たちは、それぞれ自分の当番月にソロモン王、およびソロモン王の食事の席に連なるすべての者たちのために、食糧を納め、不足させなかった。」いつも、豊かに食糧が供給されていて、不足することがありません。それが将来の神の国における大きな特徴です。

皆さんは満ち足りた生活を送っておられるでしょうか？テモテへの第一の手紙にこう書いてあります。「しかし、満ち足りる心を伴う敬虔こそ、大きな利益を受ける道です。私たちは何一つこの世に持って来なかったし、また何一つ持って出ることもできません。衣食があれば、それで満足すべきです。(1テモテ 6:6-8)」これは貧しい者の僻み、と考えるかもしれませんが、確かにキリスト者が金持ちなわけではありません。むしろ、この世に生きていて、キリストのゆえに会社で昇進できないとか、いろいろな経済的損失を被るでしょう。けれども、やはり自分の生活を振りかえって、欠けているということを見いだすことができないのです。「また、私の神は、キリスト・イエスにあるご自身の栄光の富をもって、あなたがたの必要をすべて満たしてください。(ピリピ 4:19)」

キリストに従うために職業を含めて全て捨てた弟子たちに、イエス様はこう聞かれました。「わたしがあなたがたを、財布も旅行袋もくつも持たせずに旅に出したとき、何か足りない物がありましたか。」彼らは言った。「いいえ。何もありませんでした。」(ルカ 22:35)」振り返ってみると、何も不足することがなかったのです。

みなさんが、今、キリストのところに来るならば、先に話しましたように、将来の収穫を先取る初穂になることができます。これらソロモンの国、そして神の国の前味を楽しむことができます。この方にすべての必要が隠されています。